わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ⑱⑦

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

アルコールとたばこ

TOKIOの山口達也氏が、強制わいせつ罪で書類送検になっていたことが公になり、しばらくはこの話題で持ちきりだった。

自業自得とはいえ、いい歳をした男が涙や鼻水を流し、声を震わせて謝罪する姿は、見るに堪えなかった。ジャニーズのトップアイドルのひとりとして華々しく活躍していた彼とはまるで別人。犯した罪はともかく、可哀そうに……、と思う気持ちのほうが勝った。

齢70を過ぎた女性タレントや評論家が、マンションに行った女子高校生も悪いと発言すると、彼女らを非難する声がネットで盛り上がった。それも一理ある、と彼女たちに年が近い私などは同感したものだが、それももはや時代遅れなのだろうか。

ところで、少し前にも似たようなことがあった。力士の暴行事件である。結果的にモンゴル出身の横綱は角界を去り、相撲はつまらなくなった。

両者に共通しているのは、酒を飲んでいたという点だ。力士の暴行事件はカラオケ店で起こったし、山口氏は記憶がないほどの泥酔状態だったという。しかし、彼らを責めるだけのマスコミは、酒の制限については言及しない。飲酒してなければおそらく事件は起こらなかったと思われるが、酒そのものではなく、してしまったその事についてて、激しい個人攻撃を繰り広げる展開には、少々うんざりだ。

もちろん、酒を飲むのも飲まないのも自由だし、アルコールに依存するのは個人の問題。自己責任と言ってもいい。だが、酒は昔から狂い水と呼ばれ、酒で失敗した人や依存症で苦しむ人は後を絶たないのもまた事実である。

日本は昔から酒にゆるい国だ。未成年者が飲酒する機会がもっとも多いのは、冠婚葬祭の時だというデータがある。見知った顔が集まり宴席が盛り上がると、むしろ大人たちが未成年に酒を勧める光景は珍しくない。

少し前まで、昼間から女性が気持ちよくビールを飲み干すCMを流すのは日本だけだった。現在では、国からの指摘により酒類業界の自主規制が進み、「ゴクゴク」の効果音は使わない、喉元を映さない、CMに未成年の人は使わない、などが実践されている。しかしその程度ではほとんど何も変わらないだろう。

一方で、たばこの規制はどんどん厳しくなっている。とはいえ、諸外国に比べればまだまだ甘い。2020年のオリンピックを控えた今、この状況のままでは、日本はたばこ規制の後進国と揶揄されるのは間違いない。

アルコールとたばこ、どちらが悪いか考えてみた。本人の健康問題にとどまらず社会的損失や人間関係の崩壊などを考慮すれば、明らかにアルコールのほうが分は悪い。今回の事件のように、アルコールは、仕事を失い、信頼をなくし、社会的生命さえ危うくなる事態を引き起こす。たばこにはそこまでの破壊力は、今のところ、ない。

私自身はとてもいい加減な人間なので、アルコールにもたばこにも優しい。ほどほどでとどめておけば何の問題もない。でも、それによって迷惑をかけたり事件になったりしたときに、その人個人を責めるばかりでなく、アルコールやたばこの害や国の規制について、改めて考えてみてもいいと思う。

「罪を憎んで人を憎まず」。この場合は「酒を憎んで人を憎まず」だ。

イラスト・伊藤栄章